

---

# Velcelck ~ベルセルク~

三佐 京

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Velcclck 〜ベルセルク〜

### 【Nコード】

N6633Y

### 【作者名】

三佐 京

### 【あらすじ】

異形の者がほとんどの人に認知されていない世界。

少年は異形を殺し、消し、最強の傭兵とうたわれ、非道な殺しやさげすまれ、ただそれだけに生きていた。

ある出来事に巻き込まれ、少年は深い傷をおい、まったく異なる世界へと飛ばされる。

そこは、異業がすべての人に備わった世界。

そこで出会った少女に救われる。

今まで殺してきた者だけの世界で困惑しながら、その出来事を思い

出としては悩み、少女とともに生きる道を選ぶ。

それは、少女の従者であり、使い魔となること。

少年が見いだす答えとは？ 異世界パラレルファンタジー。

## プロローグ（前書き）

初めての投稿です。

まあ、生暖かい目で読んでいただければ幸いです。

## プロローグ

彼が対峙するのは異の者。

「た、たすけてくれ！」

黒いフードに身を包んだ少年に、中年のスーツ姿の男が命を乞う。

それは意味をなさない。

乾いた銃声が響く。

そして訪れる静寂。男の頭上を掠めた銃弾が、青年の意志を隠さず伝える。

「く、くるなっ！」

相変わらず少年は無表情で口すらも動かす気配はなく、徐々に間合いを詰める。

彼はすでに決めている。

彼はすでに覚悟している。

彼はすでに……区別している。

「う、うわああー」

青年と対峙していた男が視界から一瞬にして消える。

その男は人であり、人ではない。魔法や魔術、超能力や異能といった力を有していた。そして、いまその力が恐怖によって暴走したのだ。

それは非常に危険なもの。それは完全に人ではなくなることに等しい。同じ異形の者でも恐れるほどのものだ。それはまさに導火線に火が付いた爆弾に値する。

だが、やはり少年は無表情だった。

少年は歩みを止めず、進み続ける。

少年は分かっている。男はそこからいなくなっただけではなく、そこにいないと認識されているだけだということを……。

いや、実際は見えていた。男を視界に入れた瞬間から……消えたように見える今でも、その姿は見え続けていたのだ。

「な、何なんだよお前っ！」

「……」

感情はなく。ただ、殺意の矛先に銃口の向きを合わせる機械的な行為。

引き金は引かれた。

無が有へと帰る。

赤いそれがただ有へと帰り、人であったすべては地面を抉るように消滅する。

少し遅れていたならば、おそらく青年もろともこの空間そのものが無へとなっていた。

異の者の暴走とは規格外。

男の能力はただの触れたものや自分の姿・・・厳密には認識妨害それが暴走の果てに、認識されるべきものの無への変換となったのだ。

その場に黒いフードを脱ぎ捨てる。

照らし出されたのは、どこか悲しげな瞳、日本人特有の黒い瞳に黒髪はどこか冷淡にも感じる。

不可思議な出来事はこうして幕を閉じる。

そう、少年には憎むべき理由がある。

それは彼の人生を変えるに十分であり、ただそれだけと流されるべきものでもある。

彼もまた異なる部類。

でも、黒いフードを脱ぎ捨てた少年にはついさっき人を殺したとは思えないほどのあどけない姿。

もう一つの顔。

それは日本に籍を置きながら、各国を回り、ありとあらゆる異を異によって消す矛盾を残す中で、人と接する為の顔。

少年はこう呼ばれた。「ベルセルク」と。

矛盾はそれに関わるすべての者に、狂っているのだと思わせ恐怖させた。

ベルセルクとは、英語で狂戦士<sup>バーサーカー</sup>、故に少年にはぴったりだった。

それは、異の形にしても。

青年はもはやその行為そのものにとらわれていた。

だから・・・過ちすらも平然と起こしてしまう。

故に、招かれることが正解とは誰も分からない。

だが、結果的に間違いではなかったと最終的に下す判断は誰にも分からない。そのときに下すべき者だから。

恋に似ている・・・そう思うのはきつと・・・そういうものだから。<sup>5。</sup>



報いと始まり。

報いとは、「因果応報」という言葉の通りなのかもしれない。

目の前に自分がいる。

ドッペルゲンガーと出会ったという意味合い共通するところがある。それは・・・明確に迫る「死」である。

ここは自分の部屋ではない。野外だ。

鏡がおいてあるわけではないし、まあガラスに反射していると言えればわかりやすい。

何処に？

それこそ、死を意味する位置にだ。・・・真上、頭上、空。

ここはイギリスのビルが建ち並ぶ大きな通りだ。そこを普通に歩いていただけなのに、こういった事態になるのはなれていると言えれば、慣れていた。

場所が悪すぎる。

上に見えるのは、自分。

黒い瞳に黒髪の日本人で、わかりやすく肩から提げている鞆には日本語で「清廉潔白なり」が鏡文字で意味不明に見える。

ビルが崩れた。

おそらく、人為的なもの・・・いや、異形だな。

ビルは爆発音はなく、ただスライドするように落ちてくる。

「俺が死ぬ・・・か」

長年の行いが決して許されるべきことではないことは分かっているが、それでも生きたいと思う自分の気持ちは、傲慢なのだと思いが嫌になる。

ただ、落ちてくる壁を待つ。

「\*\*\*\*\*、\*\*つ！」

聞き取れない声が、言葉が、風が体を引っ張る。

後ろに倒される形で飛ばされる。入れ替わりにすれ違うロープ人影は顔は見え、綺麗な虹色の光を身にまとっていた。

分かってしまう。異形だと、異端だと。

だが、もう一つの事実も分かってしまう。

後ろに倒れたはずなのに、地面の感触はなく、まるで穴に落ちるような形で視界が歪んだ。

命を救われた。

その意志があつたかどうかは分からないが、その事実が重く突き刺さり、思考を混乱させるには十分だった。

そして、徐々に意識は遠のき、深い眠りにつく。

目が覚めるとそこは見知らぬ天井。

起き上がるうとしたとき、強い頭痛に見舞われ、今まで寝ていたであろうベットから落ちる。

「うっ」

激しい痛みは数分続き、静かに収まり、逆に頭の中がスッキリする。

ドタドタ。

どこからか人の近づく足音が聞こえ、咄嗟に身を隠す。

とは言っても、殺風景な部屋で隠れるところはなく、ドアの死角となる部分に身を寄せる。

ギギギッとゆっくりと扉が開く。

「嘘っ！ 目が覚めていきなり出て行くなって・・・どんな人間不信

「や

その声は少女のもので、扉から部屋に入ってきた少女は綺麗な長い銀髪を揺らし、とても気品・・・いや、気が強うそうだった。

「たくつ。ほんと、最近の若いやつは恩ってやつを素直に受け取らないのが悪い！ もっと、こう・・・素直に仲を取り持つのが下手」

まるで自分に言い聞かせるかのようにつぶやく少女に罪悪感を覚え、声を掛けていた。

「あ、あの一」

「っ！？」

振り返った少女の顔は、見惚れるほど整っていて、青い瞳は自分を映し出すほどに澄んでいた。

「あ、あんたそんなとこにいたの？ ご、ゴメン。気がつかないで・・・もしかして、聞いてた？」

「こっちこそゴメン。癖で隠れちゃって・・・君が助けてくれたの？」

少女は気が強うそうな・・・まあ、取り繕っているだけのように見えるのだが、そんな感じに腕を組んでまっすぐ目を見て、赤く綺麗な唇を開く。

「そうよ。たいしたことはしていないわよ・・・ただ、家の前に倒れてたから家に入れて寝かせただけ」

「やっぱり、命の恩人だ。ありがとう」

渾身の笑顔。もはや、どれが本当なのかも分からない。だが、言葉を選んで、慎重に探りを入れるように、あくまで感謝の意を見せる。

「・・・ウザイ」

「え？」

次の瞬間、殴られた。

理解は出来ず、ただ呆然とそらされた顔は九十度逆を向く。

視線と顔の向きを少女に戻すと、機嫌を損ねた鬼がそこにはいた。

「私、嘘が嫌いなの。強いて言うなら冗談とかも嫌い。そして、そういう取り繕った笑顔は殴りたくなるの。もう一発いい？」

「・・・」

理解できずに、呆然としてしていると躊躇無くもう一発飛んでくる。

「う、うめんなさい！」

咄嗟に目をつぶる。

・・・。

来るはずの衝撃来ないことに気がつき、目を開けると・・・ほん

の数センチの距離に少女の顔があった。

「ホントね？ これは契約よ。もし、次があったら……撲殺するから」

「は、はい」

「……よろしい!」

目の前で笑顔に変わる。それは、花が咲くような綺麗な変化。

「ねえ、お腹空いてない？」

「い、いや別に……空いてます」

少女が拳に力を入れたのが分かり、咄嗟に口から言葉が出た。

「私フィーリア。フィーリア・エルファイムよ。……友と呼べる者はいないけど……フィーって呼んでもらえるとうれしいわ」

「わかった。改めて、フィーありがとう。俺はシン。ただのシンだ」

「シンね。分かったわ……じゃあ、詳しいことは食事しながらでも」

その提案に頷く。

部屋の中であまり外の景色には気がつかなかったが、外は朝。

テーブルに並べられた料理は、どれも一つだった料理を無理矢理二つに分けたような様で、目玉焼き卵が黄身が真つ二つで中身が流れ出している。

用意された量は決して少なくはない。さつと作ったであろう野菜炒めや、山積みのパンがその多さですでに満腹感の六割は満たされるほどだ。

「出来たわ！ さあ、食べましょう」

その声にハツとし、苦笑いを浮かべると強い視線が向けられたが、「う、うん」と小さく頷き椅子に座る。

「いただきます」「感謝します」

・・・沈黙。信仰の違い、あるいは・・・そう、カルチャーショック！

「変わってるわね」

「そうみたい」

その後の食事は静かなもので、団欒とはほど遠い。

食べ終わると、フィーは神妙な趣でシンを見つめる。

「シン。あなたは・・・その・・・帰るところはあるの？」

「……ないよ」

「そう。じゃあ、私のために死を覚悟する気はある？」

「……？……？……？」

答えは出ない。当たり前だ。出会って数分、命を救われたからと言ってそんな問いにホイホイと答えられるほど短絡神経ではない。

「質問を変えるわ。私の命を……人生を救ってくれない？」

「いいよ」

シンは自分でも理解できないが、そう答えなければいけないように感じた。

決して。決して、拳を握る音が聞こえたとか、テーブルがギシギシ唸ったからではない！と言い聞かせながら。

そして、フィーは言葉に出来ない「ありがとう」をシン両手を取って伝える。同時に溜めていた力も向けられたわけだが、悪い気はしなかった。

マゾではないと言い聞かせながら。

……。数分し、フィーの喜びが収まったのを見計らって、詳細を聞こうとした。

「詳しくは、何をすればいいんだ？」



「え？ あ、そうね。・・・私の従者・・・そして、使い魔になってほしいの!」

理解が出来なかった。

だが、もはや引き返せない。なぜなら、この段階での拒絶はさつき言葉を「嘘」にすること。

すなわち、「死」を意味するからである。

シンは更に落ちるのであった。

報いと始まり。(後書き)

書き方が分からない病です。

お願いです！ 誰かー誰かーアドバイスカ要望をつつ！  
ネタがほしいー

他力本願ですね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6633y/>

---

Velcelck ~ベルセルク~

2011年11月21日23時49分発行